

災害文化と伝承 ——長野県小谷村の土石流災害と伝承——

笹本正治

要旨

いつも災害に見舞われる地域においては、防災のために独自の文化ができていた可能性がある。そこで、1996年2月6日の土石流で多くの犠牲者を出した長野県小谷村を研究対象として選び、歴史的な災害の実態を確認する。その上で、この地域の災害に関係する伝説や習俗・諺などを収集し、住民がいかに災害とつきあっていたかを明らかにする。災害常襲地帯の民衆の知恵を学んで、防災を進めていきたい。

キーワード：災害文化、地形、歴史、伝説、諺

1. はじめに

1996年2月6日、長野県北安曇郡小谷村北小谷蒲原沢で起きた土石流では、14人もの尊い犠牲者を出した。これは前年7月11日の梅雨前線豪雨による災害の復旧工事に従事していた起きた災害で、小谷村としては連年の大災害であった。

この災害が天災か、それとも人災であるかは当初から論議されたが、一応人災ではないとして落ち着いた。人災が想起された理由の一端に、別の沢の工事を担当していた同県松本市の業者が、事故前日と当日「土石流の恐れがある」として、作業を見合わせていた事実があった。すなわち同年12月8日付の『朝日新聞』東京本社版には、次の記事がある。

別の沢では工事を中止 業者が判断

十四人が土砂にのみ込まれた長野県小谷村の姫川支流とは別の沢の工事を担当していた同県松本市の業者が、事故前日の五日と当日の六日、「土石流の恐れがある」として、作業を見合わせていたことが七日、明らかになった。一帯が地滑り地区であることに配慮したという。

この業者は、事故のあった姫川の支流から四*ほど南にある別の支流で治山工事をしてい

た。約十人が作業をしていたが、五日に降った雨で沢の上流に水がたまっているのを作業員らが見つけた。幹部が現場を見回り、「増水して一気に流れてくると危険」と判断、作業を休んだという。

六日も、前日ほど量は多くはなかったが、沢に水が出ていたため作業しなかったという。

一方の工区では土石流の可能性が指摘され、工事が中止されていたのである。このような予測が可能であったならば、蒲原沢においても工事を中止すべきであり、そうすれば災害はなかったはずということになる。

また事故の翌日の7日には救出に当たっていた人たちが、「黒にごりが出たら、危ない」と地元で昔から言い伝えられてきたのを信じて避難をしたことが、同じく『朝日新聞』8日の記事として、次のように見える。

「沢の濁り、山が動く知らせ」 言い伝え信じ、作業員避難

七日午前九時ごろ、長野県小谷村の災害現場でパトカーや救急車のサイレンが一斉に響き渡った。国界橋上流約八百名の地点で、救出に当たっていた作業員が、沢が濁っているのを発見

し、災害本部に通報。

作業員の大半が安全な高台に避難した。この朝到着した油圧ショベルも現場に入らず、立ち往生。作業員たちは、不安な面持ちで現場を見下ろしていた。対策本部は、「水のごりは増したわけではなく、それほど危険な状態ではなかった」として作業を一時間半後に再開した。現場は、地盤がもともと弱く、地元の人によれば、「黒にごりが出たら、危ない」と昔から言い伝えられていた。地表の黒土が沢に流れ込んでいるためで、「山が動く」可能性が高いという。作業員の一人は「敏感になっているんだ」と話していた。地元に住む救出作業員は「よその県から来た作業員たちは、ここの自然のことがよく分かっていない。それも、災害の原因の一つではないか」と話していた。

この記事からすると、地元には地域の自然認識がしっかりしていれば、災害は防げたはずだとの意識があったようである。少なくとも現地の人々の間には土石流災害の経験が蓄積され、どのような時に土石流が起きるとか、何処が危ないといった認識ができていたことになる。これを地域が作り上げた災害文化と呼ぶことも可能であろう（災害文化については首藤伸夫を研究代表とする平成4年度科学研究費補助金研究成果『災害多発地帯の「災害文化」に関する研究』、1993がある）。

前述のように犠牲者は、前年の7月11日に発生した、梅雨前線による豪雨災害の復旧工事に従事していたが、その住所と年齢を見ると次のようになる。

| | | |
|----------|----|-----|
| 青森県弘前市 | 男性 | 52歳 |
| 秋田県秋田市 | 男性 | 61歳 |
| 秋田県天王町 | 男性 | 59歳 |
| 秋田県天王町 | 男性 | 53歳 |
| 岩手県遠野市 | 男性 | 52歳 |
| 神奈川県横須賀市 | 男性 | 35歳 |
| 長野県松本市 | 男性 | 51歳 |
| 北海道渡島支庁 | 男性 | 55歳 |
| 北海道檜山支庁 | 男性 | 65歳 |
| 北海道苫小牧市 | 男性 | 62歳 |
| 新潟県糸魚川市 | 女性 | 53歳 |
| 新潟県糸魚川市 | 女性 | 53歳 |
| 新潟県糸魚川市 | 女性 | 58歳 |

犠牲者は東北地方を中心とする高齢な冬季の出稼ぎ者であった。換言するなら、新聞で地元の人が指摘していたように、この地域の土石流の危険性を知らない出稼ぎ者が、災害の犠牲になったのである。

前年7月11日の災害も集中豪雨が引きがねとなった土石流であり、それに今度と2年連続の土石流

災害に象徴的に示されるように、この地域は地滑り・土石流災害の常襲地帯であった。それだけに、地域にはこうした災害に関わる伝説や言い伝えが多くある。

ところが、実際の土木工事に際しては、他所からの労働者が多く入り、工事の受注者も地元業者は少ないので、地域の災害文化に工事に当たる人がほとんど注意を払わないのが現実である。再び蒲原沢のような災害を繰り返さないためにも、また地域性に対応した防災対策などのためにも、今後は地域に伝えられてきた、災害にまつわる民衆の知恵に目を向けていかねばならない。

そこで本稿においては、小谷村における土石流や地崩れに関わる災害文化の一端を確認していくことにする。ほかの地域においても同様な文化を確認できれば、蒲原沢のような災害を防ぐことができるだろうと考えるからである。

2. 地名と地形

『長野県の地名』では、小谷村の内では災害に関係しそうな地名などについて、次のような記述が見られる。

来馬村—村高が江戸時代を通じてほとんど増加しないのは、周囲を中生代中期に属する粘板岩の露層来馬層を基岩とした急峻な山地に囲まれ、姫川に臨んだ狭い平ら地に立地して、開発の余地の乏しかったことによる。

常法寺—明治44年(1911)に当寺の南面にある稗田山が崩落したが、その砂泥流は姫川を流下して、それにより当寺地の前面もまた決壊した。

中谷村—姫川右岸に位置し、姫川に流入する中谷川の谷に沿った狭長な村である。北部フォッサ・マグナの断層線にあり、泥岩・砂岩の地質や地下水などの関係から地滑りが頻発した。特に清水山はその代表的なものである。

石坂村—姫川左岸に位置し、四面を山に囲まれた山村である。村を貫流する蒲川の支流にある稗田山が明治44年(1911)に崩落し、その砂泥流の山津波によって江戸時代以来の人家は全滅に近い被害を受けた。

こうした説明に見られるように、地形や地名からしても小谷村は地滑り・土石流災害などの多発地帯であった。地域の特徴は早くから知られており、池原静雄は次のように記している。

姫川流路の自然景観は、小谷村来馬付近境にして、上流部と下流部では趣を異にする。上流部は第三紀の集塊岩・泥岩・砂岩帯であり、

ほぼ一定の川幅で白馬岳など西部山岳地帯から搬出された砂礫により埋積されている。流域には第三紀泥岩帯に属する多くの地すべり地形が眺められる。

姫川は、浦川の合流点より下流の来馬付近で急に川幅を増しているが、浦川流域の稗田山、赤倉山の崩壊による土砂の流出により、姫川本流にかかる小谷橋の橋台は埋まるばかりである。

下流部には、中生層、古生層および蛇紋岩などの古期岩類が露出し、本流も穿入蛇行し、いわゆる姫川溪谷を作る。県境の葛葉峠付近は崩落地形であり、姫川には転落した大岩塊が眺められる。下流は小滝川・根知川の合流によって堆積量も増し、根知・大野付近では河谷平野が広がり川幅も200mにも及ぶ。

姫川は急流のうえ、山岳地帯の雪融け水量も多く発電への利用もさかんであるが、融雪や豪雨にともなう地質的な災害も多く、流域の荒廃は著しい。そのため交通が妨げられ、入口の流出を招き、地域の発展が阻害されることが多い。

姫川流域の地すべりは、地質的には第三期地すべりと破砕帯地すべりに大別できる。しかし個々の地すべりについては地域的な特徴を示している。地質調査月報(1956)では姫川流域の地すべりについて、五つのタイプに地域を分題して、地すべり地域の特質を明らかにしている。

- (1) 姫川と小谷断層に挟まれた地帯および中谷川流域……集塊岩および泥岩・砂岩帯にともなう崩壊と地すべり
- (2) 根知川……おもに泥岩帯、蛇紋岩にともなう地すべり
- (3) 平岩および山の坊一帯……おもに蛇紋岩にともなう地すべり
- (4) 稗田山および風吹岳……新时期集塊岩の崩壊
- (5) 八方山……蛇紋岩の崩壊

その他姫川断層・沓掛断層・小谷断層・蛇紋岩帯における断層破砕帯や断層粘土の形成によるもの。流紋岩や流紋岩質凝灰岩・泥岩層の粘土化によるもの。隆起性の山地の下刻作用の著しい河川域が側方浸食で末端部が流失し安定を欠く場合。火山噴出物(風吹岳)の地下水浸透などの影響によるものなどが考えられる(新潟県社会科学研究会編著『雪国の風土—信越国境の地理的研究—』58頁,古今書院、1980)。

このように地名、地理学、地質学など様々な面で、この地域が地滑り・土石流の災害地であることは、

既に常識となっている。

災害伝承そのもの前提として、地名を確認しておきたい。「小谷」の「たり」は原始名で、樽に通ずるとされ、断崖状になっている谷の深い地形をさすといわれている(『長野県の地名』715頁,平凡社、1979)というが、もしこの通りならば地名そのものが災害を引き起こす地形を示しているのである。

今後は災害の頻発する場所につく地名と、その地域的特色を明らかにし、両者を結びつけるような形で、地名と災害地との関係を細かく追求していかなくてはならない。

3. 過去の災害

過去の災害の確認として先ず重要なのは、歴史学の方法に従って古文書や記録などから災害の事実、実態の追求をすることである。これによって災害のあった年代を確定し、その実態に迫り、災害の原因や特徴を認識してこそ、次の災害に備えることが出来るからである。

そこで、とりあえず地元の郷土史などから、小谷村でいかに地滑りや土石流などによる災害が頻発していたかを確認しておきたい。

小谷村の災害年表

- 宝永4年(1707)10月4日 未の刻大地震、家屋が多数倒れる(『小谷村誌』歴史編・社会編、小谷村誌刊行委員会、1993)。
- 正徳4年(1714)3月15日 大地震で坪の沢大山抜け(小谷村誌)。この時30人、牛馬8匹死ぬ(信府統記=信濃史料叢書)
- 享保10年(1724)7月7日 大地震(小谷村誌)。
- 享保19年(1734) 浦川上流崩壊、諏訪神社社殿や人家多数流出(小谷村誌)。
- 寛保2年(1742)6月29日 地震で千国親沢が抜け落ち、新道を開く(小谷村誌)。
- 文化6年(1809)1月21日 大久保山が抜け、家屋23軒倒壊(小谷村誌)。
- 文政1年(1818)12月31日 李平に雪崩発生し人家6軒押し潰す、死者7名(小谷村誌)。
- 文政2年(1819)1月 李平に雪崩、6軒が被害(小谷村誌)。
- 文政7年(1824)12月14日 池原に雪崩発生、死者4名(小谷村誌)。
- 文政年間 ボッカの宿泊中、戸倉山の大雪崩があり、21人が死亡したと伝えられる(歴史の道調査報告書Ⅷ)。
- 天保3年(1832)3月18日 横川山抜け(小谷村

- 誌)。
- 天保 12 年 (1841) 1 月 伊折・柳瀬・宇 (雨) 中に雪崩起こる (小谷村誌)。
- 天保 12 年 (1841) 4 月 8 日 浦川上流崩落, 人家・耕地流失 (小谷村誌)。
- 弘化 3 年 (1846) 4 月 大地震, 梨平・坪の沢家屋倒壊 (小谷村誌)。
- 弘化 4 年 (1847) 3 月 24 日 善光寺地震, 小谷地方でも死者・家屋倒壊多数 (小谷村誌)。
- 安政 6 年 (1859) 3 月 24 日 大地震で南日道の飲み水出口が倒壊 (小谷村誌)。
- 文久 3 年 (1863) 3 月 14 日 李平水害, 人家 3 軒倒壊 (小谷村誌)。
- 元治 1 年 (1864) 7 月 18 日 大綱水害, 人家田畑に大被害 (小谷村誌)。
- 明治 5 年 (1872) 清水山の間から地滑り, 2 戸移転 (小谷村誌)。
- 明治 18 年 (1885) 4 月 11 ~ 13 日 北小谷が 3 日半日の大雨により被害 (小谷村誌)。
- 明治 20 年 (1887) 4 月 1 ~ 4 日 清水山奈良尾地籍で地滑り発生, 田畑・林・原野に多くの被害 (小谷村誌)。
- 明治 20 年 (1887) 9 月 27 日 葛草連で地滑り, 明才堰下より中谷川へ流出 (小谷村誌)。
- 明治 23 年 (1890)・24 年 清水山奈良尾峠の東方から西端にわたり地滑り, 被災者 9 戸 (小谷村誌)。
- 明治 29 年 (1896) 10 月 南小谷で大暴風により橋流出 (北安曇郡誌 1 巻)。
- 明治 31 年 (1898) 9 月 6・7 日 中谷川・姫川の氾濫で被害が出る (小谷村誌)。
- 明治 32 年 (1899) 小土山に地滑り, 姫川を堰き止める (小沢健造ほか『北アルプス小谷ものがたり』信濃路, 1975)。
- 明治 35 年 (1902) 7 月 姫川洪水, 小土山崩壊 (北安曇郡誌 1 巻)。
- 明治 36 年 (1903) 5 月 18 日 暴風により県道柳瀬・月岡・親沢の 3 橋梁流失, その他山沢崩落 (小谷村誌)。
- 明治 38 年 (1905) 6 月 姫川流域各地に水害, 小谷凶作となる。収穫皆無の田が中土村で 6 町 4 反に及ぶ (小谷村誌)。
- 明治 39 年 (1906) 4 月 11 日 中谷村塩の久保融雪のため地滑り, 人家十数戸移転 (小谷村誌)。
- 明治 39 年 (1906) 10 月 2 日 降雨により白岩崩落 (北安曇郡誌 1 巻)。
- 明治 40 年 (1907) 12 月 7 日 小谷地方に地震 (小谷村誌)。
- 明治 40 年 (1907) 清水山が山王神社の西方梨原平全域にわたって地滑り, 住宅 3 戸が移築 (小谷村誌)。
- 明治 41 年 (1908) 2 月 中土村半坂で地滑り, 4 戸移転 (小谷村誌)。
- 明治 44 年 (1911) 6 月 中土村道田に地滑り, 人家 2 戸埋没 (小谷村誌)。
- 明治 44 年 (1911) 7 月 洪水のため姫川が南小谷村, 中土村に流出, 倒壊の家屋有り (小谷村誌)。
- 明治 44 年 (1911) 8 月 8 日 稗田山再度崩落, 同時に中土村立山, 高地坂崩落 (小谷村誌)。
- 明治 45 年 (1912) 4 月 26 日 稗田山崩壊, 5 戸が埋没・流出 (小谷村誌)。
- 明治 45 年 (1912) 5 月 4 日 稗田山崩壊 (小谷村誌)。
- 明治 45 年 (1912) 7 月 21 ~ 22 日 梅雨により稗田山が堰き止めた湖水決壊, 3 戸流出 (小谷村誌)。
- 明治 45 年 (1912) 中土村白岩で館山の西北部数十町歩, 中谷川に陥落 (小谷村誌)。
- 大正 1 年 (1912) 9 月 23 日 暴風雨のため南小谷で家屋倒壊ほか被害多数, 源長寺も倒壊 (小谷村誌)。
- 大正 2 年 (1913) 清水山が中沢上流の山入地区より押し出し, 居宅 3 戸移築, 水田地帯 5 町歩被害 (小谷村誌)。
- 大正 4 年 (1915) 3 月 10 日 中土村外沢平崩落 (小谷村誌)。
- 大正 4 年 (1915) 4 月 1 日 池原裏山崩落, 姫川を堰き止め人家埋没 (小谷村誌)。
- 大正 6 年 (1917) 3 月 16 ~ 17 日 北小谷村横川地滑り 11 町歩, 人家 10 戸危険となる (小谷村誌)。
- 大正 6 年 (1917) 7 月 大雨により姫川出水, 沿岸に被害 (北安曇郡誌 1 巻)。
- 大正 10 年 (1921) 9 月 暴風で被害, わらび平で 2 戸, 峰 1 戸, 千国崎で 1 戸が全壊 (小谷村誌)。
- 大正 12 年 (1923) 4 月 豪雨で姫川洪水, 来馬地区の被害大 (北安曇郡誌 1 巻)。
- 大正 12 年 (1923) 9 月 1 日 関東大震災, 村内にも地震あり (小谷村誌)。
- 大正 14 年 (1925) 7 月 姫川洪水, 宮本橋流出 (小谷村誌)。
- 昭和 1 年 (1926) 清水山上部の小林氏宅地に亀裂 (小谷村誌)。
- 昭和 2 年 (1927) 4 月 12 ~ 27 日 中土村清水山に地滑り発生, 住宅 9 戸に被害 (小谷村誌)。
- 昭和 7 年 (1932) 3 月 14 日 12 日の大降雨のため中土村宇新屋地籍内に亀裂, 地滑りの地籍約 10

- 町歩（小谷村誌）。
- 昭和 9 年（1934）2 月 9 日 大平で雪崩発生，住宅 1 戸埋没，死者 8 人，負傷者 1 人（小谷村誌）。
- 昭和 9 年（1934）4 月 4～6 日 清水山・白岩地滑り発生，3 戸倒壊（小谷村誌）。
- 昭和 9 年（1934）7 月 9 日 豪雨で中谷川氾濫，橋梁流出（北安曇郡誌 1 巻）。
- 昭和 10 年（1935）6 月 中土村黒倉において内務省直轄砂防工事開始，中土村清水山において農林省直轄砂防工事開始（小谷村誌）。
- 昭和 11 年（1936）6 月 28 日 豪雨により北小谷の県道冠水（小谷村誌）。
- 昭和 14 年（1939）1 月 3 日 大平山地滑り発生，4 戸倒壊，県道不通となる（小谷村誌）。
- 昭和 14 年（1939）4 月 21 日 風張山崩壊，大糸南線・県道不通。親沢地区 4 戸倒壊し，坪の沢地区下まで冠水（小谷村誌）。
- 昭和 14 年（1939）8 月 大平山再度地滑り発生，4 戸倒壊，県道不通となる（小谷村誌）。
- 昭和 19 年（1942）7～10 月 4 回の洪水（北安曇郡誌 1 巻）。
- 昭和 20 年（1945）4 月 大糸線現千国・南小谷間護岸決壊（北安曇郡誌 1 巻）。
- 昭和 20 年（1945）7 月 姫川増水，大糸線護岸各所で決壊（北安曇郡誌 1 巻）。
- 昭和 20 年（1945）10 月 姫川氾濫，第三姫川橋より遠不通（北安曇郡誌 1 巻）。
- 昭和 21 年（1946）12 月 19 日 北小谷光明地籍で表層雪崩発生，1 戸倒壊，1 名死亡（小谷村誌）。
- 昭和 22 年（1947）4 月 外沢で地滑り発生，14 戸中 12 戸が移転（小谷村誌）。
- 昭和 23 年（1948）7 月 雷雨により風吹山堀土を押し出し，姫川を止める（北安曇郡誌 1 巻）。
- 昭和 32 年（1957）4 月 南小谷祖子山地滑り発生，1 戸全壊，死者 2 名（小谷村誌）。
- 昭和 32 年（1957）8 月 大雨により大糸線不通（北安曇郡誌 1 巻）。
- 昭和 34 年（1959）2 月 18 日 神平に地滑り，住宅 2 戸が危険となり，大糸線不通（北アルプス小谷ものがたり）。
- 昭和 34 年（1959）7 月 姫川氾濫，大糸線中土・北小谷間築堤決壊（北安曇郡誌 1 巻）。
- 昭和 34 年（1959）9 月 26 日 台風 15 号（伊勢湾台風）による大被害発生，災害救助法が適用される。被害総額 1 億 2 千万円（小谷村誌）。
- 昭和 35 年（1960）3 月 5 日 清水山地滑り発生，4 戸全壊，4 戸半壊，耕地 14 ヘクタールを失う（小谷村誌）。
- 昭和 35 年（1960）4 月 1 日 南小谷弥太郎に地滑り発生，住宅 1 戸，非住宅に被害。この年に弥太郎全戸転出（小谷村誌）。
- 昭和 35 年（1960）8 月 小土山が国から「地滑り防止区域」の指定を受ける（北アルプス小谷ものがたり）。
- 昭和 36 年（1961）3 月 8 日 清水山地滑り発生，住宅 1 戸全壊。4 月 6 日に再発生，白岩で 1 戸移転。6 月 30 日また発生，住宅 1，倉庫 1 倒壊（北アルプス小谷ものがたり）。
- 昭和 36 年（1961）9 月 16 日 台風 18 号により戸土分校大破（小谷村誌）。
- 昭和 36 年（1961）11 月 26 日 上手村中通りに地滑り発生，住宅 1 危険となる（北アルプス小谷ものがたり）。
- 昭和 36 年（1961） 信濃水平地滑り（小谷村誌）。
- 昭和 37 年（1962）1 月 祖子山全戸転出（小谷村誌）。
- 昭和 37 年（1962）4 月 4 日 月岡に地滑り発生，住宅 1 戸全壊（北アルプス小谷ものがたり）。
- 昭和 38 年（1963）3 月 20 日 戸土に大規模な地滑り発生，田畑に被害（小谷村誌）。
- 昭和 39 年（1964）4 月 7 日 白岩地籍に地滑り発生，家屋 1 戸避難（北アルプス小谷ものがたり）。
- 昭和 39 年（1964）7 月 12 日 9 日からの豪雨で千国崎護岸決壊ほかの被害（村勢要覧）。
- 昭和 39 年（1964）10 月 21 日 浦川土砂流出，住宅 1 戸浸水（北アルプス小谷ものがたり）。
- 昭和 40 年（1965）5 月 8 日 浦川で鉄砲水，浦川橋流失（村勢要覧）。
- 昭和 40 年（1965）7 月 17 日 12 日からの豪雨で各所に被害，大糸線の不通長期化（村勢要覧）。
- 昭和 41 年（1966）2 月 25 日 戸土地区で地滑り発生，3 戸居住不能となる（小谷村誌）。
- 昭和 41 年（1966）3 月 1 日 清水山地籍に地滑り発生，耕地に被害出る（北アルプス小谷ものがたり）。
- 昭和 41 年（1966）3 月 7 日 北日道に地滑り発生，3 戸居住不能となる（小谷村誌）。
- 昭和 44 年（1969）8 月 12 日 9 日からの豪雨により災害各所に発生，中土真木下県道決壊，燕岩護岸決壊，林道中土・土沢線決壊，清水山・上雨中に地滑り発生，3 世帯に避難勧告（北アルプス小谷ものがたり）。
- 昭和 44 年（1969）9 月 10 日 集中豪雨により各所に被害（村勢要覧）。
- 昭和 45 年（1970）4 月 11 日 滝の平に地滑り発生，

住宅1戸半壊（北アルプス小谷ものがたり）。

昭和45年（1970）4月21日 月岡に地滑り発生、非住家一戸全壊（北アルプス小谷ものがたり）。

昭和45年（1970）雪解け期 小土山に地滑りの兆候、泥崎地区では上部から水路を造り流水を地下に浸透させないようにする（北アルプス小谷ものがたり）。

昭和46年（1971）4月2日 光明沢に鉄砲水、床上1、床下2浸水、非住家1全壊（北アルプス小谷ものがたり）。

昭和46年（1971）4月4日 小土山地区に大規模な地滑りの兆候、5世帯に避難勧告（北アルプス小谷ものがたり）。

昭和46年（1971）7月16日 小土山で地滑り、姫川を堰き止める。住宅1、非住家1全壊、床上10、床下2浸水、その他非住家12棟浸水（北アルプス小谷ものがたり・小谷村誌）。

昭和46年（1971）11月29日 柳瀬・杉山沢に鉄砲水、大糸線不通、住宅2戸に被害（北アルプス小谷ものがたり）。

昭和47年（1972） 南小谷真木全戸転出（小谷村誌）。

昭和52年（1977）3月25日 姫川温泉で地滑り、死者1名、負傷者3名（小谷村誌）。

昭和56年（1981）6月23日 姫川増水、国道小谷橋西側決壊、交通止め（村勢要覧）。

昭和56年（1981）8月23日 台風15号による村道等の災害26カ所（小谷村誌）。

昭和56年（1981）11月30日 姫川流域浦川砂防20周年及び清水山地滑り対策25周年記念式典（小谷村誌）。

昭和57年（1982）8月1日 台風10号により土砂崩落、大糸線不通（村勢要覧）。

昭和58年（1983）9月16日 中土葛草連全戸転出（小谷村誌）。

昭和59年（1984）2月10日 大雪のため災害救助法適用される（小谷村誌）。

昭和59年（1984）7月26日 大雨で横根沢・東親沢氾濫（村勢要覧）。

昭和60年（1985）7月8日 大雨で14日まで国道不通（村勢要覧）。

昭和62年（1987）9月9日 浦川国有林治山事業30周年記念式典（小谷村誌）。

昭和63年（1988）12月21日 県道千国北城線沓掛地籍で土砂崩落発生、5名死亡、1名重傷（小谷村誌）。

平成2年（1990）2月11日 樽池で鉄砲水発生、スキー客2名死亡（小谷村誌）。

平成3年（1991）9月27日 台風19号で58戸被害、被害総額推定1億300万円（小谷村誌）。

平成4年（1992）1月28日 県道川尻小谷糸魚川線白岩地区で地滑り、白岩から田中下間全面通行止め（小谷村誌）。

平成7年（1995）7月11・12日 梅雨前線による豪雨災害（『平成7年7月11日発生小谷村梅雨前線豪雨災害の記録—この体験を語り継ぐ』小谷村梅雨前線豪雨災害記録編集委員会、1997）。

平成8年（1996）12月6日 蒲原沢の土石流で14名が亡くなる。

ここに取り上げたように、史料的には18世紀に入ってから災害が知られるだけであるが、それでも昨年までの290年間に114回、3年に1度以上の災害に見舞われていることになる。これを明治以降に限ってみると、130年間に96回で1.35年に一度の割合、つまりほとんど連年災害が起きているのである。しかもこれらは史料の制約があるので、知られている災害はじっさいに起きた災害のすべてではない。

こうしてみると、いかに現在の小谷村域が頻繁に災害を受けていたかが明らかである。ここでは、どのような災害が起きたかを確認しただけであるが、その具体的な状況を古文書によって確認することは今後の課題であり、それを通じて過去の災害への対処の仕方も明らかになるであろう。これは歴史学の分担すべき仕事といえよう。

ともかく小谷村においては災害が高い頻度で起こっており、こうした歴史事実を確認して行くだけでも防災意識を高めることができる。

4. 災害の伝説

過去の災害の事実確認は歴史学の方法によってなされねばならないが、その基礎となる古文書や記録は必ずしもすべての災害を伝えるわけでなく、いかなる意図によって記録され、いかにしてその記録や古文書が保存されてきたかが問題になる。災害の事実すら、すべてが記録や古文書の形で残っていると限らないのである。

民衆レベルの災害意識などを探るのには、意識の中で多く伝えられた伝説・昔話などが有効である。特に伝説は具体的な物とつながった話なので、地域の住民に災害を常に思い起こさ、ふだんの防災や災害時の対処の確認にもつながっていたといえる。

そこで以下に、小谷村の地滑りや土石流につながる災害の伝説を確認していきたい。

1. 大槻平

北小谷村深原部落の火葬場の下にある大槻平は昔大槻伝蔵といふ者の居た処だったといふ。伝蔵は真那板山崩落のため姫川が堰き止められた際、加賀の前田侯のところへ城を焼いておちついたといふ(『北安曇郡郷土誌稿』第7輯 60頁, 信濃毎日新聞社, 1937)。

2. あいの町(愛ノ町)

葛葉峠の地下に愛ノ町という村があったが、その村は昔、真那板山が崩落して地中に埋没してしまっただけらしい。

その亡念によるのだろうか、時折鶏の鳴く声が聞こえるという(郷津弘文『千国街道からみた日本の古代』301頁, 銀河書房, 1986。この伝説は『北安曇郡郷土誌稿』第7輯 62頁, 信濃毎日新聞社, 1937にも出ている)。

3. 塔の峰

深原に塔の峰という所がある。昔、五重塔が流れてこの地についた所だといふ伝えられている。

常誓寺の塔が地震のために漂着したのであらうという。そして一本杉と塔ノ峰とは水平線上にあったと伝えられている。これによつていかに水かさが多かったかを想像し得るのである(郷津弘文『千国街道からみた日本の古代』301頁。この伝説は『北安曇郡郷土誌稿』第1輯 10頁, 郷土研究社, 1930にも収録されている)。

4. 葛葉峠と常誓寺

真那板山が崩落して姫川をせき止めた。姫川は増水して大湖水が出現した。

沿岸の集落は湖底に埋められ、人家は上へ上へと押し流された。その当時は下寺や来馬の河原などはなかったらしい。集落は現在の河原の地表よりまだ下にあったらしい。

糸魚川にある常誓寺はこの騒ぎの時に引き移ったという。

下寺にある来島郵便局のすぐ下の所は稗田山崩落のために川瀬が打ちつけて深く川底を掘った。その時大きなケヤキの二股が現れた。その大木は真那板山崩落の際、下寺の部落の上の段丘から崩れ落ちたものであるという。段丘にはケヤキの林があって、今その切株がたくさん残っている。

また下寺という地名は、常誓寺があったためだろうという。葛葉峠のできた時代や常誓寺の移転した時代は更に分からない。常誓寺の記録では、享和四年(一八〇四)に移転して、その時の住職は杉木祐孫氏であるという(郷津弘文『千国街道からみた日本の古代』302頁。この伝説は『北安曇郡郷土誌稿』第7輯 61頁にも収録されている)。

5. 来馬の一本杉

北小谷村来馬の常法寺の上に一本杉といふ地名がある。今から三十年前迄は其処に周囲二丈余の杉の古木があった。其の杉の幹に鑿で掘った穴があって、昔舟を繋いだのだと云はれてゐた相である。山崩で今の葛葉峠が出来た当時の事ではないかとも云はれてゐる(『北安曇郡郷土誌稿』第1輯 64頁)。

6. 葛葉峠の一本杉

いろいろな伝説から総合すると、葛葉峠は真那板山の崩落によつてできたらしい。姫川が一時的に大湖水となったことも合点のいくことである。来馬常法寺の上に周囲二丈(約六m)ばかりの杉の老木があった。それに二つの穴があげられて船をつないだという伝説がある。この歴史ある一本杉も伐採されて今はただ根株を残すのみである。その付近の地名を一本杉という(郷津弘文『千国街道からみた日本の古代』303頁)。

7. 山王の池の主

中土村清水山山王上区には、山王様が祀ってあり、其の附近に山王の池があった。この池の主は赤牛で、村の人々が草刈に行くと、其牛が出て一緒に遊んださうである。少し前その池を潰して大きな田にしたが、近年清水山部落の崩落と共にぬけて、又池になりはじめてゐる(『北安曇郡郷土誌稿』第1輯 10頁)。

8. 稗田山の崩落と金山和尚

昔、北小谷村の来馬に小谷五人衆のひとり横沢という家があった。その妻は姑と折合が悪く、何時かは姑を亡きものにしてやろうと決心しその機会をねらっていた。

たまたま元日の日、かねて用意の毒薬を朝茶に混じて姑に進めた。姑は何の気なしに祝いの茶だからといって主人に遣った。主人は知らずにその恐ろしい茶を飲み、直ちに年頭の挨拶に出かけ、先づ常法寺へ行って住職の金山和尚に年賀の挨拶をした。

金山和尚は大檀那の家の主人だから大いに歓待した。しばらくすると客人は腹痛を起こして苦しみだし、人に扶けられて漸く帰宅することができた。家は周章狼狽、看護に全力を尽した。けれどもその効なく遂に不帰の客となった。家人の嘆きは一通りではなかった。

妻は和尚が毒殺したのだと訴えた。和尚はそれがために縛についた。和尚は無実であると一生懸命に弁明したが聴き許されず、遂重罪犯人として松本藩へ送致されることになった。和尚は如何にも無念でたまらないので、途中松ヶ峰に着いて来馬が見えなくなる時、足に力を入れて大地を踏んで叫んだ。

「人を無実の罪におととして覚えておれ。うら(俺)が無理ならこのままでもよいが、うらが無理でなか

つたらこの山ひっくりかえれ。」と地団駄ふむと、ついていた杖は地中に深く没した。すると晴天俄にかき曇り、稗田山は大鳴動をした。

明治末年、稗田山は大崩落して来馬耕地を埋めたが、横沢家の所有地が最も被害が多かったと。これもその怨念が祟ったのだという。

それから来馬では金山様という碑を建てて、その霊を祀る処が数ヶ所に及んだ。

稗田山崩落の年の春、石坂の人たちは松ヶ峰を越えて稗田山の方めざし、浦川の深い谷を上っていく緋の衣を着た僧を見たという（小谷村教育委員会編『小谷民俗誌』314頁、小谷村教育委員会、1979。この伝説は小池直太郎編『小谷口碑集』、郷土研究社、1922、に「怨念山を崩す」として収録されている。また『北安曇郡郷土誌稿』第7輯164頁にも出ている）。

9. 稗田山崩壊の前報せのあった話

細野家の総本家と云はれる南小谷村石坂の上手に古くから伝えられてゐる弘法様のおかげじがあつて、何か大変事のある時などは家を守って下さったといふので非常に崇められてゐる。去る明治四十四年稗田山崩壊の折、夜になると同家の屋根峰に大坊主が登り鉢巻きで突立って手を振り「逃げる逃げる」と叫んでゐるのを目撃した村人は「そら上手の弘法様がお立ちになったぞ、何か事がなければよいが」と口々に云つたといふ事である。かうしたことが三晩つづいてその夜、物凄い音響と共に夢にも思はなかつた稗田山が崩壊して浦川筋へ押出して来た。此の時上手の新宅松兵衛一家は全部埋没されてしまった。その直前至つて実直な松兵衛氏の夢枕に坊主が現れ、やはり「逃げる逃げる」の言葉を三声残して去つたが氏はどうしても不思議でならなかつたと語つたとのことである。

稗田山崩壊の年の春石坂の人は松ヶ峰を越えて稗田山の方へ浦川の深い谷を上って行く緋の衣を着た僧侶を見た相だ。それが崩落の前兆だったと云はれてゐる。この僧は無実の罪に陥れられた金山和尚で「小谷口碑集」三五頁に「怨念山を崩す」とあるのがそれである（『北安曇郡郷土誌稿』第1輯25頁）。

10. かいさい様

東小谷の石坂部落に堂があつて、その庭にかさい様といふ大きな石があつた。その石にささればきつとおできが出来、又からだにおできの出来てゐる人はこのかさい様をお願いひすればなほして下さるといふおできの守り神様であつた。稗田山崩落のとき地下に埋つてしまつて影も形も見えないが、高さ五尺・周囲二三丈もある水成岩であつたといふ（『北安曇郡郷土誌稿』第7輯169頁）。

11. 大池の雨乞い

稗田山の奥に風吹岳がある。そこに大池がある。

昔、雨乞いのために神官を頼んで、村中の人がこの上つた。池の中に大きな岩がある。それに橋をかけ、神官を独り岩の上へ送つた。そうして祈禱をしてもらった。祈禱の終わるころ池の中から大蛇が現れてその岩の周りを三巻きした。神官は驚き恐れてただちに陸へ飛び帰つて気絶した。池中は見る見る増水し、天はにわかにかき曇つて大雨が降つてきたのである。皆の衆は恐れて神官を助けて下山した。

神官は一度は蘇つたが、これが原因となつて黄泉の旅へと去つた（郷津弘文『千国街道からみた日本の古代』308頁。この話は『北安曇郡郷土誌稿』第1輯174頁、『北安曇郡郷土誌稿』第7輯195頁にも収録されている）。

12. 宮本の社

昔南小谷村の坪ノ沢が山崩れのために姫川を堰き止めたことがあつた。其の時段々水嵩が増して北城村の塩島まで水を湛へたことがあつた。押出して来た土砂と一緒に馬のくつが流れて来て宮本の宮の大杉にかかつた。村人は「宮があぶない」といって白倉山へ御神体を御遷し申して祀つた。其の後水の引けてから白倉の神様はそこを飛び出して宮本へお帰りになつたので再び宮本に氏神様を祀ることとなつた。宮本へお帰りになつたときお通りになつた道は樹が裂けてをつたといふ（『北安曇郡郷土誌稿』第7輯216頁）。

災害に関わる伝説の数は、一つの村としては多いといえよう。このうち1から6は真那板山の崩落に関係した伝説である。これらの伝説の年代ははっきりしないが、1と4からして江戸時代の事件である。しかもそれは年表で見ることではできないが、地域にとっては重要会見を持つ事件であつた。

7は清水山の崩落に関係するものであるが、年表から見ても明治5年(1872)以降崩落が続いており、伝説からするとこれより以前から、そうした事実があつたようである。

8から11までは稗田山の崩落に係するものである。この崩落について年表では明治44年(1911)からのものが示されるが、8の伝説からすると近世の初期に大きな崩落があつたようである。

12の坪の沢崩落も年表上では見付けられない。

伝説は年表と重なる部分もあり、小谷村の災害については事実を伝えていふと考えられる。記録や古文書に現れない災害が、伝説の形で伝わっていることは間違いない。そこでこうした災害にまつわる伝説を収集することによって、従来知られていなかつ

た災害の認識をすることができよう。

同時に伝説はそれにまつわるモノを目前にして語る。昔話が広くどこでも語られるのに対し、伝説は地域の実在のモノに関係して語られるだけに、地域の人々に災害を思い起こさせ、防災意識を高める手段としてもこれを語り伝えることが重要である。伝説は災害の記念碑としての意味を持つのである。

5. 災害に冠する信仰・諺

これだけ災害が多いからには、どのような時に災害が起き、いかに対処すればよいかといった地域独自の理解が蓄積されている可能性が高い。その一端は、先の伝説に伴っているが、直接的には諺・言い伝えなどとして伝わっている。

災害を避けるための手段の一つは、神や仏の力に頼るものである。小谷村に災害に関係していかなる信仰の伝説や対処法について確認してみよう。

【信仰】

1. 地じりの信仰

小谷の地は地じりの被害が多い。春の雪解けの頃から梅雨の頃にかけて、傾斜地で地盤の弱い所には、亀裂を生じ易い。これに雨水がしみ込んで地じりを起こす。

このぬけ止めには昔から、戸隠神社へお参りに行きぬけ止めの祈禱をお願いする習慣がある。亀裂の生じた場所が、多くの人に被害を及ぼす場合とか共有地であれば仲間が相談して代表が戸隠まで代参に出かける。昔は徒歩で白馬村森上から、柳沢峠を越えて鬼無里村を通り、戸隠まで一日の強行程で歩いた。

戸隠の坊で一泊して祈禱をお願いし、お札と杭を二本とか四本とか受けて帰り、ムラ人とお祭りをし、ぬけ止めの杭を亀裂の入っている要所に打ち込む、こうして信仰が、村人等に、伝えられている(『小谷民俗誌』182頁)。

2. 山崩れを防いだ八幡様

南小谷村宇立屋の八幡様は昔「まこびし」(地名)のぬけ出して来た時、戸板をもって防いで下すったので土砂は黒川沢と赤沢との両方に分れて、おかげで立屋部落は難を免れることが出来た。今でも八幡様を境にして土質の全く異つてゐるのはそのためであるといふ(『北安曇郡郷土誌稿』第2輯20頁、郷土研究社、1930)。

3. 腕無し地蔵

南小谷村弥太郎部落は戸数五軒山の麓の斜面に点在した部落である。この村の中央に地蔵堂があつて、其の中には無造作に刻まれた片腕の無い地蔵様が記

つてある。この地蔵様については次の様な言ひ伝へがある。昔大雪崩が出て上の山からこの部落へ押し来て来た。五軒の家はすんでのことこの下になると見えた時、この雪崩は皆一ヶ所へ集つて来て五軒の家の中間にある地蔵様のところを走つて一筋になって下の川原へ落ち込んだ。そのために五軒の家は危ぶく難を免れた。村中が川原へ下りて見ると、地蔵様はちゃんと雪の上に座つてをられたが、よく見ると片腕もがけてゐる。村中はこれは地蔵様が我々の身代りになって下すつたのに違ひないといつて、お堂を建て、この中へお祀りした。其後「おいたはしいから」といふので片腕をつくつておつけ申したが、翌朝行つて見ると落ちてゐる。何運つてもどうしても駄目だった。そこでこれは不思議なことだと口よせに占つてもらふと、お地蔵様の申されるのに「俺を刻んで呉れた様な名人が作つて呉れなくてはつりあはない」とのことであつた。それで今にそのまゝになつてゐる(『北安曇郡郷土誌稿』第2輯29頁)。

4. 姫ヶ淵

南小谷村にも姫ヶ淵と呼ばれてゐる淵があるが、ここは大昔奴奈川姫が越後から姫川を遡つて休まれた処なので姫ヶ淵といふようになったのだといひ、姫川の名もこれから出たのだといふ。又この淵の涸れたときは国に變事のある前兆だといひ、日清・日露の両戦役の前には實際涸れたことがあつた(『北安曇郡郷土誌稿』第7輯2頁)。

神や仏によって災害を防いでもらおうとする意識が非常に強かつたことは、以上の伝説でも明らかである。

このうち1は地滑りが起きた時、戸隠神社で抜け止めの祈禱をし、杭を打ち込むというもので、神の力を得て災害を防ごうとする。

2・3は災害の盾となつてくれた八幡と地蔵の伝説である。このような話はよく聞かすが、この伝説を積極的に利用するならば、災害時にこうした場所に逃げ込めば助かる可能性が高いのではなからうか。

次に災害の予知ともいえる、天気予報に関わる諺などについて確認していきたい。

【気候に関係する諺など】

『北安曇郡郷土誌稿』第4輯(郷土研究社、1922)から北安曇郡における気象に関する俗信のうち、土石流に関係しそうなものを抜き出してみると、次のようになる。

ほととぎすが鳴くと雨が降る。

みそつこが鳴けば雪が降る。

家の中へ百足が出ると雨が降る。

山燕が出れば天気が変わる。

燕が低く飛ぶと雨。
みみずが出れば雨が降る。
鶏が早く上れば天気が良い、遅く上れば天気が変わる。
鮠が出れば天気が変わる。
鮠が啼けば天気が変わる。
蟻が宿替をするると二三日中に天気が変わる。
蚊が餅つきや天気が変わる。
蚤が騒ぐと天気が変わる。
犬が草食えば天気が変わる。
猫が槍を立てる（脚をたてること）と天気が悪くなる。
猫が頭を耳越しに撫でれば雨。
霧の這出る時は雨が降る。
雁が北へ行くと雨が降る。
雀が地べたに下りると雨が降る。
雉が東の方で鳴くと天気が変わる。
朝霧は天気が変わる。
朝とんびは晴となり、夕方とんびは雨となる。
魚が飛び上がると雨が降る。
魚が騒げば夕立がある。
天気が変わる時は池の鯉が浮き上がる。
蛇がひなたぼっこをすれば雨になる。
蛇が沢山出れば天気が変わる。
いかりが鳴けば天気が変わる。
夕方ぶよが沢山出て騒ぐと天気が変わる。
虫の類が低く集まる時は雨が降る。
小鳥が宿へ早く着けば天気がよい。遅く着くと天気が変わる。
猫がけつを嘗めれば天気が変わる。
げじげじが出れば雨降る前兆。
蜂が高い所へ巣を作ればその年は雨が多い。
鮠が啼けば大雪。
猫が尻尾をあぶると雪が降る。
蛙が冬鳴けば雪が降る。
蟻が家の中へ乱れ込む時は大雨か洪水がある。
岳燕が飛乱すれば嵐。
雀の羽音がすれば雪が降ってくる。
金魚が水に浮かぶと雨。
蛙が木に上って鳴けば雨が降る。
猫が余り飛んであるけば雨が降る。
なめくじが出れば雨が降る。
蠅の一層多い時は雨。
魚がよく釣れる時は雨。
蟻が引越すれば大雨が降る。
蟹が川から上がると大雨出水あり。
西から東へ鳥が飛ぶと雨。
蚤が首へ上がると天気が変わる。

犬がけつまきや天気が変わる。
朝雀が鳴くと雪が降る。
魚の鱗に似た雲が出れば雨と知れ。
車にびくが沢山載って行くのを見れば天気が変わる。
びくが北へ行けば雨が降る。
馬鹿が北へ行けば雨が降る。
女が腰巻きを長く出せば雨が降る。
渡場の綱が下がれば雨が降る。
乾の方が曇れば雨が降る。
甲子の雨は六十日続く。
はんげん様はかたはしい（降り始めれば毎日の様に降る）。
春の彼岸が月過ぎになると大雨。
土用三郎に雨降りや十二日降る。
八せんの入りに降れば八せんの間けるまで降る。
八せんにも雨降りや六十日降る。
その月の朔日に壬が多ければその年は水が多い。
壬の日に雨が降ると続く。
冬至に雷が鳴れば雨が多い。
土用の入りから三日間（太郎・次郎・三郎）のうち雨が降ると土用降りになるといって農家は恐れている。
冬至がはるかいると来年天気が悪い。
土用に入って三日目に雨が降れば土用中降る。
八せんにも降れば十二日降る。
帯霧が立てば天気が変わる。
夕焼けが黒くなれば翌日は天気が悪い。
遠い所の鐘が聞こえると雨が降る。
家の中へ煙がたまって抜けぬ時は雨。
飯を炊く時に釜肌に水が廻る時は雨。
足駄を洗えば雨が降る。
火箸を二ぜん一緒におくと雨が降る。
河床が赤く錆びれば来年天気が続く。
子供が泥いじりすれば天気が悪くなる。
樺が湿気ると雨が降る。
木の葉があるか落ちぬ年は雪が多い。
藁の葉の裏がかえれば三日目に雨が降る。
煙草の香の好いときは天気が変わる。
便所が厭に臭うと雨が降る。
お櫃に御飯が附かなければ天気が悪い。
めんつ飯に汗をかくと天気が変わる。
家の中の煤が落ちると雨が降る。
鍋が錆びれば天気が変わる。
釜の研ぎそ錆びれば天気が変わる。
煙草が湿気れば雨が降る。

柿の葉の落ち葉の裏の出ているのが多ければ雪が多い。
楮の長く伸びる年は雪が多く降る。
藤蔓の伸びる年には雪が早く降る。
漬け菜の丈の割合に伸びる年は雪が早い。
木の葉がひっくり返って風の吹く時は天気が悪い。
川柳が真っ直ぐに立てば洪水がある。
樽の葉が揃って出ると大水が出る。
大根の根が長ければ大雪が降る。
月の暈被った中に星が三つあると三日目に雨が降る。
月の上がりに暈を被れば雨が降る、日の下りに暈を被れば雨が降る。
星の大きく見える時は雨が降る。
山が鳴れば雪が降る。
大晦日の晩雲があれば翌年雨が多い、無ければ天気がよい。
霜の遅い時は雪が早く降る。
天の川が東西になれば雪が降る。
雨滴の水が長くはれば雪が多く降る。
川や沢に虹が跨げば雨が降る。
山に帯状の霧がある時は雨が降る。
空が晴れきって雲のない時は三日中に天気が変わる。
雲が動くと天気が変わる。
東の方の夕焼けは雨。
星が水汲むと雨。
夜上がりの天気は長持ちがない。
朝焼けして白くなれば雨、黒くなれば風。
蛇腹雲降れば雨。
虹が早く消える時は雨風となる。
西が曇れば雨、東が曇れば風。
夕焼けして黄色になれば雨が降る。
虹が道を横切れば天気が変わる。
雲が北へ行くと天気が変わる。
雲が南へ行けば雨が降る。
空にこけら雲が出れば天気が変わる。
朝焼けが紫色に変われば雨が降る。
東山の上に横雲がかかると雨が降る。
東窓のあいた時には雨が降る。
岩戸山へ出た雲は雨になる（南小谷村）。
炉の中で風が吹けば雨。
囲炉裏の下座の隅に火箸が集まれば明日は雨降りだ。
馬鹿が騒ぐと天気が変わる。
頭が重いと明日は天気が変わる。
糞蠅が出て七十五日たつと雪が降る。

通り日が当たれば雨が降る。
雨降り花を取ると雨が降る。
空に真っ直ぐな條の出来れば地震のある知らせである。
雉は地震を知って鳴く。
栗の花盛りには雨が降る。
帯霧は雨。
川虹立ったら川越しするな。
朝虹ふいたら川辺へ出るな、夕虹ふいたら馬に鞍乗せて待て。
夕焼けしたら川向へ行くな。
朝てっかり天気が面倒。
朝のちゃっかり油断をするな。
朝のてっかりあてにはならぬ。
南風は土用降り。
こうした俗信については『小谷民俗誌』199頁以下にも多く収録されているが、地域に住む者にとつては、日常の周囲のものに目を向けることが重要だったのである。さらに、「昔小谷四ヶ庄では葛の花の咲き方で雪の降り方の早い遅いを知った。葛の花が下へ向いて咲く年は雪が早く降り、上へ向いて咲く年は雪が遅く降るといはれ、糸魚川へ行き来する人たちもこれに依って行き来の切り上げを決めたものだといふ」（『北安曇郡郷土誌稿』第7輯264頁）ともいう。
これらを見れば明らかのように、過去においてこの地域の住民は自然現象のすべてに実に細かい気配りをし、周囲のすべてから自然の動きを知り、そこから災害も予知しようとしていた。現在の我々は自然から大きく距たり、特別な自然災害においてだけ、自然の驚異を認識するのであるが、日常的に自然とつきあいが無くては小さな地域の自然は理解できない。自然に目を向けて天候などを判断することは現代でも行われており、この地域を舞台とする山岸昭枝氏のエッセイ『遙かなる山里の小さな話』（青春出版社、1998）にもよく示されている。
1995年1月17日の阪神・淡路大震災の前兆については、さまざまな自然現象が想起されたが（佃為成『大地震の前兆と予知』朝日新聞社、1995）、こうした自然に目を向けての予知は昭和11年（1936）越智秀一によっても集められている（『天災予知集』、紫雲荘）。いわゆる現代科学を持たなかった中世に生きた人々は、さらに注意深く自然を見ていた（拙著『中世の災害予兆—あの世からのメッセージ』、吉川弘文館、1996）。
近年自然とつきあい、向き合う教育の重要性が叫ばれているが、それと同時に地域独自の自然とその背後に存在する独自の文化を理解させていくこと

が、地域教育として大切である。その際、これまで触れてきたような謠や信仰が大きな意味を持つのではなからうか。

6. おわりに

これまで見てきたように、災害の伝承や謠などを収集することによって、地域の災害への認識が確認でき、きめの細かい災害対策がとれるものと思われる。こうした災害伝説と歴史実態について私は既に、『蛇拔・木霊・異人－歴史災害と伝承－』（岩田書院、1994）で長野県木曾谷の状況を確認した。

しかしながら、現状において災害伝承の収集は困難になりつつある。土石流災害が起きた小谷村など、山間地においては過疎化が進み、実際に伝説などが伝わらなくなっているためである。ちなみに、小谷村の世帯数と人口の推移を見ると次のようになる。

| 年次 | 世帯数 | 人口 | 人口密度 | 人口指数 |
|-------------|-------|-------|------|-------|
| 明治9 (1876) | 1 357 | 6 667 | 24.9 | 78.8 |
| 明治23 (1890) | 1 380 | 7 359 | 27.5 | 87.0 |
| 明治38 (1905) | 1 378 | 7 773 | 29.0 | 91.6 |
| 大正9 (1920) | 1 601 | 7 695 | 28.7 | 91.0 |
| 昭和5 (1920) | 1 461 | 7 281 | 27.1 | 86.1 |
| 昭和10 (1935) | 1 549 | 8 243 | 30.3 | 96.2 |
| 昭和15 (1940) | 1 578 | 8 243 | 30.7 | 97.4 |
| 昭和22 (1947) | 1 653 | 8 578 | 32.0 | 101.4 |
| 昭和25 (1950) | 1 601 | 8 279 | 30.9 | 97.9 |
| 昭和30 (1955) | 1 689 | 8 460 | 31.6 | 100.0 |
| 昭和35 (1960) | 1 670 | 7 917 | 29.6 | 93.6 |
| 昭和40 (1965) | 1 595 | 6 857 | 29.6 | 81.1 |
| 昭和45 (1970) | 1 479 | 5 893 | 22.0 | 69.1 |
| 昭和50 (1975) | 1 385 | 5 264 | 19.6 | 62.0 |
| 昭和55 (1980) | 1 619 | 5 165 | 19.3 | 61.1 |
| 昭和60 (1985) | 1 427 | 4 699 | 17.5 | 55.5 |
| 平成1 (1989) | 1 431 | 4 549 | 17.0 | 53.8 |
| 平成4 (1992) | 1 447 | 4 494 | 16.8 | 53.1 |

人口密度は1^{*}。平方メートルあたり（以上は『小谷村誌 社会編』93頁による）。

小谷村では昭和22年を最高に、その後人口が減少し、現在は最盛期の半分近くまで減っている。特に災害多発地域で集落ごとの移転が多くなされたことは、先の年表で明らかである。そして現在の山村における過疎問題、集落移転は、従来そのまま地域に住んでいたのでは生活が成り立たない、本人の意図に関わらず、生計が成り立たず財産価値も落ちるといった意味では、社会が生み出した災害ともいえるかも知れないのである。

災害文化は極めて地域的特色が大きいだけに、過疎という状況にあって、地域に根付いた災害文化そのものが伝わらなくなる。

また住民がいても伝説などは現代の学問大系からはずされ、語られることが少なくなっている。たとえば、先に見たようにかつては自然そのものに目を常に向け、そこから天気微妙な変化を知ろうとしてきた。現在でははっきりした天気予報がなされ、全国的にあるいは県レベルで予報がなされ、それを前提にして我々は日常行動を行う。これは科学の進歩によるもので、その恩恵は限りない。気候は狭い地域の中における変化も大きい。だからこそ地域独自の災害文化が伝えられたのである。そうした狭い地域における災害文化はほとんど忘れられる。かつて地域で伝えられてきた知恵とも言えるような知識は、学校教育では教えられることなく、したがってそれ自体も無価値だと判断されて伝えられなくなりつつあるのである。

したがって伝承収集を早急にしないと、地域に伝えられて来た災害文化が失われる。このためにはまず地域の市町村史類などに、災害文化に関する記述の必要性を訴えていかなくてはならない。ともかく現時点で採集できる情報は、網羅的に集めて置かねばならない。同時に現在にあっては、口承による伝承の収集だけでは、過去の災害文化の実態解明をとうていしえぬ。古文書や記録類、これまでに文字化されてきた民俗調査報告書・民俗誌など、既に書承の世界に入っている資料の整理も急がれる。

地域の歴史事実を解明するのみならず、住民の心の壁にも入るような研究をすることは、地域史研究の方向であるが、現実のところは必ずしもうまくいっていない。それは本当に地域を主体において研究を進めないことが多いからである。そうした中で地域の災害文化を探ることは、厭でも地域を主体におかねばならず、地域史を豊かにするために必要である。

一方で注意したいのは、県や市町村といった行政区分を越えて、水系や山脈など災害の起きそうな地域の文化を全体としてつかまえ、情報を流すことである。小谷村の災害においては、県を越えて隣接する糸魚川市の被災者があった。地域的には近くても行政区画が異なると、情報伝達が弱くなる。災害についての情報も、行政区域を越えると案外伝わっていないのである。我々は現状の厳しさを認識した上で過去の災害の情報を確認し、災害をより少なくするように努力すべきであろう。

参考文献

- 小沢健造 (1975) : 北アルプス小谷ものがたり, 信濃路, 243pp.
- 小谷村誌編纂委員会 (1993) : 小谷村誌, 小谷村誌刊行委員会, 自然編 660pp. 歴史編 538pp. 社会編 897pp.
- 小谷村教育委員会 (1979) : 小谷民俗誌, 小谷村教育委員会, 353pp.
- 小谷村梅雨前線豪雨災害記録編集委員会 (1997) : 平成7年7月11日発生小谷村梅雨前線豪雨災害の記録, 110pp.
- 北安曇郡志編纂委員会 (1923) : 北安曇郡志, 北安曇郡役所, 1196pp.
- 北安曇郡誌編纂委員会 (1971 ~ 84) : 北安曇郡誌, 1 ~ 5 巻,
- 越智秀一 (1936) : 天災予知集, 紫雲荘, 240pp.
- 郷津弘文 (1986) : 千国街道からみた日本の古代一塩の道・麻の道。石の道一, 梅池高原ホテル出版部, 273pp.
- 小池直太郎 (1922) : 小谷口碑集, 郷土研究社, 日本民俗誌大系第六巻, pp. 173-260.
- 笹本正治 (1994) : 蛇抜・木壺・異人 - 歴史災害と伝承一, 岩田書院, 385pp.
- 笹本正治 (1996) : 中世の災害予兆 - あの世からのメッセージ一, 吉川弘文館, 194pp.
- 信濃教育会北安曇支部 (1930) : 北安曇郷土誌稿第一輯, 郷土研究社, 198pp.
- 信濃教育会北安曇支部 (1930) : 北安曇郷土史稿第二輯, 郷土研究社, 191pp.
- 信濃教育会北安曇支部 (1932) : 北安曇郷土史稿第四輯, 郷土研究社, 366pp.
- 信濃教育会北安曇支部 (1937) : 北安曇郷土史稿第七輯, 信濃毎日新聞株式会社, 293pp.
- 信濃史料刊行会 (1973) : 新編信濃史料叢書第五巻 信府統記上, 信濃史料刊行会, 354pp.
- 下中邦彦 (1979) : 長野県の地名, 平凡社, 1159pp.
- 首藤伸夫 (1993) : 災害多発地帯の「災害文化」に関する研究, 平成4年度科学研究費補助金 (重点領域研究(1)) 研究成果報告書, 191pp.
- 杉本好文 (1984) : いにしへの里小谷 - 姫川流域における史話一, 信毎書籍センター, 166pp.
- 佃為成 (1995) : 大地震の前兆と予知, 朝日新聞社, 190pp.
- 長野県教育委員会 (1981) : 歴史の道調査報告書Ⅶ - 千国道一, 長野県教育委員会, 54pp.
- 新潟県社会科教育会 (1980) : 雪国の風土 - 信越国境の地理的研究一, 古今書院, 310pp.

Disaster Culture and Oral tradition
 - The Debris flow at Otari village. Nagano prefecture in the context
 of the Oral Tradition -

Shoji SASAMOTO

Synopsis

Disaster prone area often have a unique culture of disaster prevention. This paper deals with the disaster culture of Otari Village, Nagano Prefecture, which was seriously damaged by debris flow on February 6, 1996. Due to this disaster, 14 people died. This paper investigates the nature and history of disasters that have occurred in this area. Moreover, it deals with the legends, manners, customs, and proverbs that have sprung from such disasters. If we hope to prevent such disasters from occurring in the future then it is my belief that we must learn from this kind of traditional folk wisdom found in places like Otari.

Keywords : disaster culture; topography; history; oral tradition; proverb